資料館ノート　第79号　　平成21年1月16日発行

江戸の名物・名産と江東地域⑤

水がもたらした加工業の発展

江東区深川江戸資料館

江東地域が工業の盛んな土地として注目されるようになるのは、明治になってからのことです。国の殖産興業政策をうけて、豊かな水とあわせて、広大な面積を占めていた大名屋敷の跡地が工場になっていったことが、江東の工業を飛躍的に発展させました。

江戸時代には、まだ工業といえる産業は、江東地域ではそれほど注目されていません。縦横に走る運河がもたらす水の便のよい地域に、銅の鋳銭を行う銭座が置かれ、また、鋳物師が鉄器の鋳造を行い、関東・東北の小麦や大豆が運ばれて味噌・醤油の醸造が盛んにおこなわれたことが、江戸期の代表的な工業（手工業）といえるでしょう。今号では、これらの加工業のようすと、その生産品についてみていきます。

「下総国醤油醸造之図（大日本物産図会」　歌川広重Ⅲ画　明治10年(1877) 深川江戸資料館蔵
絵は野田の醤油醸造の情景。大島でもこのように醤油醸造が行われていた。

釜六・釜七の活躍

釜六（釜屋六右衛門）、釜七（釜屋七右衛門）は、ともに近江国辻村の出身で、幕府の求めに応じ、寛永17年(1640) 江戸へ出てきました。初め芝で鋳造業（鋳物師）をはじめましたが、のちに大島に移ります。幕府の鍋・釜をはじめとする鋳鉄製の什器の製作を一手に引き受け繁栄しました。

鍋・釜だけでなく、梵鐘、天水鉢、仏像などの分野でも活躍し、付近の横十間川は「釜屋堀」と呼ばれたほどの賑わいでした。その作品は、豪徳寺の梵鐘（世田谷区指定有形文化財）、浅草寺時の鐘など、現在でも使われているものが少なくありません。

釜六は太田氏、釜七は田中氏です。また、釜六は、「近江大掾」の呼称を朝廷からゆるされ、江戸時代半ば以降、これを刻銘に残した作品が多くみられるようになります。写真の善徳寺天水桶も、このような事例のひとつです。

維新後も釜六は明治まで、釜七は大正まで、東京の人びとの生活を支える鍋・釜、そのほかの鋳鉄製の生活用品を造り続けました。

醤油の醸造

江戸地回り経済の発達とともに、関東でも野田や銚子をはじめとして醤油の醸造が盛んに行れるようになります。やがて江戸近郊でも醤油の醸造が行われるようになりました。

紀州から伝わった醤油の醸造が、関東で盛んになった理由のひとつは、北関東で産する大豆が醤油に向いていたことです。これらを運ぶため水

善徳寺（三好2丁目）鉄造天水桶　　2008・11撮影
陽鋳銘から、釜六の作品であることが知られる。文化4年(1807)の作といわれる。もともと1対であったが、戦災で片方が失われ、製作の経緯等がわからなくなったものであるが、「近江大掾藤原正次」は釜六である。

運の便がよいところに醤油醸造業が栄えました。

天保の頃 (1830~1844)、小名木川に沿って大島周辺には、醤油醸造をおこなう業者が多く集まっていました。小名木川に沿った大島 5 丁目にあった勝智院には、天保の頃のものといわれる醤油醸造業にたずさわる杜氏の仲間が建立した供養塔が建っていました。これにより大島周辺や、大横川の一部にあたる亥の堀（井ノ堀）周辺には醤油醸造の蔵が何軒もあったことが知られます。勝智院は、現在は千葉県佐倉市へ移転し、これに伴って供養塔も移転してしまいました。

東砂一丁目の上妙寺には、明治の富裕な醤油醸造業者で小学校開設に私財を投じた増田市五郎の墓があり、江東の醤油醸造が盛んであったことが知られます。

味噌の醸造

豊かな水と水運の便に恵まれ、関東近郊の味噌や醤油の醸造に適した大豆と小麦が集まり、また塩の集散地でもあった江東地域では、醤油と同様に味噌の醸造もさかんに行われました。元禄 15 年 (1702)、吉良邸討ち入りを果たした赤穂浪士が高輪泉岳寺に向けて引き上げる際に甘酒をふるまったと伝えられ、現在も続く永代橋際の乳熊味噌のほか、何軒か味噌蔵がありました。

さて、昭和 20 年 (1945) の空襲で、江東区域は、壊滅的な被害を受けてしまいます。戦後新生・江東区によって復興のためのさまざまな施策が展開しますが、その集大成が、昭和 29 年に開催された「東京都江東区復興記念産業展」です。この出品目録をみると、計 4 社の味噌醸造会社が自社製品を出品しています。その後人々の生活様式や東京の工業のあり方が様変わりするまで、小名木川に面した地域を中心に味噌蔵が営まれていたことがわかります。

肥料の生産

深川は、江戸時代から肥料の取引が行われたところです。肥料にする干した鰯（干鰯）が船で運ばれ、問屋が荷揚げして売るところを「干鰯場」とよびました。江東区内には、「永代場」（佐賀 1)、「銚子場」（白河 1) をはじめとする干鰯場があり、銚子方面から運ばれた魚油を取ったあとの鰯を肥料として売る問屋が佐賀町周辺を中心に繁栄しました。

明治になると、小名木川沿いの釜屋堀に近い大島 1 丁目で、明治 21 年 (1888) から、わが国で初めての化学肥料の製造が始まりました。のち、大日本肥料株式会社となり、大正 12 年 9 月の関東大震災まで製造を続けていました。

明治以降の江東地域で興った工業製品を「江東の名産」にかぞえては、それだけで膨大になってしまいますが、肥料については、江戸時代から続いた干鰯を考え合わせたとき、江東地域の名物・名産のひとつといってもよいでしょう。

「関東醤油番付」嘉永 6 年 (1853)　野田市郷土博物館蔵
番付は、相撲番付に見立てて格付けを表にした刷り物。井（亥）ノ堀（江東区石島）の釜屋弥七は、野田の茂木と肩を並べ大関（当時は横綱はないので、最高位）にまで上り詰めている。

「関東醤油番付」
東 2 段目と西 3 段目に同じ井（亥）ノ堀の柏屋与三郎が出てくる。同一人物が経営する蔵元と思われるが、別々の商標をもつ。